

## 『現代日本小説集』における佐藤春夫：その版本及び訳文の検討を中心に

秋吉, 収  
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際文化学講座

<https://doi.org/10.15017/7153575>

---

出版情報：言語科学. 52, pp.95-108, 2017-03-31. The Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 『現代日本小説集』における佐藤春夫

—その版本及び訳文の検討を中心に

秋吉 收 (Shu AKIYOSHI)

## はじめに

前稿<sup>1</sup>でも紹介したように、魯迅・周作人編訳『現代日本小説集』（1923年6月、上海商務印書館）は、中国で最初に出版された日本近代文学の精選集として極めて重要な意義を有する（奇しくもその一ヶ月後、1923年7月に絶交に至った兄弟二人の最後の共同作業としても注目される）。この作品集には、大正時代を中心とする15作家30篇の作品が収められ、周作人によるその序文（1922年5月20日於北京）には、次のように記されている。

日本の小説は二十世紀において驚くべき発達を遂げ、国民的文学の精華となったばかりでなく、幾多の有名な著作はまた世界的価値を持つようになった。（中略） 中国は日本と種々の関係があり、我々は日本を知る必要もあれば、日本を知ることの便利もある。いまこの創始の書を編むことができた。（中略） そのうち、夏目、森、有島、江口、菊池、芥川五人の作品は、魯迅君の翻訳で、そのほか（国木田、鈴木三重吉、武者小路、長與、志賀、千家、江馬、佐藤春夫、加藤武雄：引用者注）は私が訳したものだ。（拙訳による。）

極めて注目すべき成就であったが、実は意外にも現在に至るまで研究対象としては殆ど取り上げられたことがない。そこには、翻訳を始めとして出版の中心となったのが（中国で一般的に「漢奸」と批判される）周作人であったこと、研究には高度な日本文学の知識と日本語が要求されることなどの要因が考えられる。だが、そうして忌避、敬遠されてきたことで、かえってそこにはいまだ研究の余地が残されている。

小論は、『現代日本小説集』に収められた15人の日本人作家のうちから、佐藤春夫を取り上げ、いまだ曖昧な部分について検討を加えるとともに、その翻訳の実際について調査報告するものである。

—

『現代日本小説集』を扱った日本で唯一の専論が、小川利康氏の「中国語訳・有島武郎「四つの事」をめぐって—『現代日本小説集』所載訳文を中心に—」（1992年3月、『大東文化大学紀要』

<sup>1</sup> 「近代中国における大正文学の受容—『現代日本小説集』及び芥川龍之介を手掛かりとして」（2014年10月、『言語文化論究』33号〔九州大学言語文化研究院〕）

第 30 号〈人文科学〉)である。その緻密な考証は、魯迅と周作人の役割分担の実際や、巻末に附された「關於作者的説明 (作者に関する説明)」が周作人「『日本近三十年小説之發達』(1918 年)等を下敷きとして具体的にどのように書かれたのかなど重要な事実を明らかにした。だが、残念ながら佐藤春夫についての調査ははまだ検討の余地がある。収録翻訳作品の多くが魯迅・周作人によって該集出版以前に既に他の新聞雑誌などに発表されていたことを仔細に紹介する中で、小川氏は次のように述べる。

ここまでで有島武郎を除く魯迅担当の作家については全て検討が済んだことになる。残されたのは周作人が担当した武者小路実篤、佐藤春夫、長與善郎である。これらの作家については、周作人、魯迅の当時の文章から初出と見なし得るものを見いだすことは出来なかった。魯迅が武者小路に言及した文章は限られており、佐藤・長與については、皆無である。従って、これら三作家についてはテキストレベルでの検討を断念せざるを得ない。

(下線は断りのない限り引用者による。以下同じ。)

実際には、佐藤春夫についても、収録作品のうち二篇が周作人によって先に『晨报副刊』に掲載されていたことが確認される(詳細は後述)。そもそも、『現代日本小説集』に収められる佐藤春夫の作品は全部で四篇、掲載順に「私の父と父の鶴との話」(訳題：我的父親與父親的鶴的故事)「たそがれの人間」(黄昏的人)「形影問答」(訳題も同じ)「雉子の炙肉」(雉雞的燒烤)であるが、小川氏の論文は、このうち「私の父と父の鶴の話」「黄昏の人間」の二篇(タイトルもやや不正確)を挙げるのみで、「雉子の炙肉」「形影問答」は脱落している<sup>2</sup>。収録作品全体にわたって網羅的に述べられ、また考察の中心は標題の如く有島武郎にあることから、佐藤春夫についてはやや手薄になってしまったのもやむなしといったところか。

なお、『現代日本小説集』における佐藤春夫作品について、藤井省三著『魯迅と日本文学 漱石・鴉外から清張・春樹まで』(2015 年、東京大学出版会)は、「第 5 章 魯迅と佐藤春夫—両作家の相互翻訳と交遊」にて、魯迅周作人によるその作品選択の経緯に加えて、収録作四篇の梗概とその性格についての考察がなされている(162 頁)。<sup>3</sup>

## 二

前述の如く、『現代日本小説集』には巻末に「關於作者的説明 (作者に関する説明)」が収められ、著者の 15 人についてかなり周到な紹介が施されている。そこからは、訳者の魯迅と周作人の、収録作家ひいては日本近代文学に対する抱懐、評価が垣間見られ極めて注目される。

<sup>2</sup> 近年に至り、中国の若い研究者が周作人による佐藤春夫の訳業に言及している。張潔宇『独醒者与其他の灯—魯迅『野草』細読与研究』(2013 年、北京大学出版社)、56 頁。李雅娟『以“人”為目標的文学政治实践—周作人思想研究(1906—1946 年)』(2013 年、北京大学博士論文)、197 頁。など。なお、周作人の訳業について、拙著『魯迅—野草と雜草—』(2016 年、九州大学出版会)でも考察を試みた。

<sup>3</sup> 佐藤と魯迅の関係について、特に魯迅の散文詩集『野草』を中心に考察したものに、拙論「魯迅と佐藤春夫—散文詩集『野草』をめぐって」(2013 年 7 月、『東方学』126 輯)がある。

佐藤春夫の翻訳は周作人の担当であり、その「作者に関する説明」も周作人による。それは次のようなものである。

佐藤春夫 (Sato Haruo) 生於一八九二年，是現代的一個詩的小說家。芥川龍之介 說：

「佐藤春夫是詩人，……所以他的作品特色也在於詩的這一點上。

佐藤的作品裏，並沒有諷道德的，也不是沒有寓哲學的東西，但是裝點他的思想的常是一脈的詩情。

佐藤的詩情似乎與世間所謂世紀末的詩情最相近，纖婉而兼幽渺之趣。」

他的作品又充滿豐富的空想，可以說是一種特色。谷崎潤一郎替他的病的薔薇做序，曾說：

「據我想來，只有生於空想的人纔有得為藝術家的資格。藝術家的空想無論怎樣的與自然相隔離，只要他總是在作者的頭裏活著動著的力，這空想也豈不是同自然界的現象一樣，是真實的一種麼？能夠將空想化為真實，這纔算是有了為藝術家而生活著的價值了。」

我的父親與父親的鶴的故事 (Watakushi no chichi to chichi no tsuru no hanashi) 「黃昏的人」 (“Tasogare no ningen”) 並見小說集幻燈 (1921) 中。

形影問答 (Keiei mondo) 見美的街市 (1920) 中。

雉雞的燒烤 (Kiji no aburiniku) 見阿絹與其兄弟 (1919) 中。

(固有名詞に附された下線は原文通り：引用者注)

引用される芥川の記事からは詩人佐藤の「詩情」が、谷崎の記事からは「空想」が佐藤文学を表徴するキーワードとして抽出される。ここでまずは、周作人が直接引用する芥川と谷崎の記事の原文をより詳しく参照して見ることで、周作人がそこに何を見たのか、どこに共感したのかを跡づけてみたい。

まず、ここに引かれる芥川の記事は、「佐藤春夫氏の印象 何よりも先に詩人」で、『新潮』30巻6号(1919年6月1日発行)に掲載されている。

一、佐藤春夫は詩人なり、何よりも先に詩人なり。或は誰よりも先にと云へるかも知れず。

二、されば作品の特色もその詩的なる點にあり。詩を求めずして佐藤の作品を読むものは、猶南瓜を食はんとして蒟蒻を買ふが如し。到底満足を得るの機會あるべからず。既に満足を得ず、而して後その南瓜ならざるを云々するは愚も亦甚し。去つて天竺の外に南瓜を求むるに若かず。

三、佐藤の作品中、道德を諷するものなきにあらざらず、哲學を寓するもの亦なきにあらざれど、その思想を彩るものは常に一脈の詩情なり。故に佐藤はその詩情を満足せしむる限り、乃木大将を崇拜する事を辭せざると同時に、大石内蔵助を撲殺するも顧るところあらず。佐藤の一身、詩佛と詩魔とを併せ蔵すと云ふも可なり。

四、佐藤の詩情は最も世に云ふ世紀末の詩情に近きが如し。纖婉にしてよく幽渺たる趣を兼ね。「田園の憂鬱」の如き、「お絹とその兄弟」の如き、皆然らざるがあらざらず。これを稱して當代の珍と云ふ、敢て首肯せざるものは皆偏に南瓜を愛するの徒か。

詩人佐藤への賛美は、むしろ「詩」に拘泥してやまぬ芥川自身の感慨がそこに投影されている

ようにも筆者には感ぜられるが、いずれにせよ、周作人は芥川の言葉を通して佐藤春夫に強く「詩」を意識することになった。なお、芥川の文中に引く「乃木大将」は、佐藤の「同時代私議」(『すばる』1912.12)中の詩「乃木大将を悼む言葉」を踏まえ、「大石内蔵助」は、「大石内蔵助は殺されたり」という有名な句を記す「愚者の死」(『すばる』1911.3)によるだろう。また、佐藤の出世作「田園の憂鬱」(1916～19『中外』等)にたゆたう詩情の議論は当時の文壇を風靡したが、「お絹とその兄弟」(1918.11『中央公論』)に詩を見るのは芥川の独創と言えるかもしれない。なお、『新潮』掲載の特集『佐藤春夫の印象』は、芥川の記事のほか、谷崎潤一郎「佐藤春夫君と私と」、生田春月「驚くべき早熟の男」、與謝野晶子「一人の親友として」、生田長江「即興詩人として」を収載する。

次に、「作者に関する説明」後半を形成する谷崎潤一郎『病める薔薇』序(1918年9月執筆。同年11月天佑社刊、佐藤春夫著『病める薔薇』巻頭掲載)を読んでみよう。

友人佐藤春夫君の最初の著作集「病める薔薇」が今度天佑社から出版されることは、予にとっても此の上もない愉快である。予は予の著作が出版されると同様の楽しみを以て、此の著が一日も早く書肆の店頭へ出づることを期待して居る。

(中略)

今日の文壇の或る一部——否、寧ろ大部分には、空想を描いた物語を一概に「拵え物」として排斥する傾向がある。しかし、古往今來の詩人文學者にして、嘗て空想を驅使しなかつた者があるだらうか。たとへ自然派の作家であつても、空想力に乏しくして果して眞實を表現することが出来るだらうか。若し藝術の領域から空想を除いてしまつたら、いかにして藝術が成り立つだらうか。予の考へを以てすれば、空想に生きる者のみが藝術家たり得る資格があるのである。藝術家の空想が、いかに自然を離れて居ようとも、それが作家の頭の中に生きて動いて居る力である限り、空想も亦自然界の現象と同じく眞實の一つではないか。空想を眞實と化し得てこそ、始めて藝術家としての生きがひがあると云ふものである。「病める薔薇」の著者の作物が萬一「現實に立脚して居ない」といふ理由の下に批難を蒙ることがあるとすれば、予は著者に代つて以上の如く答へんとする者である。

谷崎らしく論旨は明快である。多くの識者が既に指摘するように、当時の周作人は世紀末詩人ボードレールに代表される「頹廢」的文学世界に強い共感を示しており、“憂鬱”なる無為の日々を綴る高等遊民たる佐藤の文学に、周作人がそうした要素を多分に認めていたことは容易に想像される。周作人が翻訳して『現代日本小説集』に収められる四篇のうち、「たそがれの人間」(黄昏的人)や「形影問答」はまさにその傾向を代表する作品と言えるだろう。

参考まで、谷崎潤一郎が晩年にしたためた「佐藤春夫と芥川龍之介」(1964年5月『毎日新聞』原載)も引用しておこう。佐藤と芥川と谷崎と、周作人の筆に集った三人について考察する上で、この文章は某かの示唆を与えてくれるのではないか。

三人のうち、私だけが六つ、七つ年上で、芥川と佐藤は、ほぼ同年配だったと思う。二人はい

いライバル同士だったが、文壇的には芥川の方が先に有名になった。佐藤が「田園の憂鬱」で一躍認められたころ、芥川は「羅生門」「鼻」「芋粥」などの作者として、すでに新進作家の地位を築いていた。しかし私は、佐藤が「田園の憂鬱」の前に書いた「西班牙犬の家」を読み、そのころからひそかに彼を認めていた。

二人の間の競争意識は、かなり激しかったように思う。私は佐藤から、芥川の作品の悪口を何度か聞いた覚えがあり、とくに「妖婆」という小説の批評は、ずいぶん手きびしかった。

芥川の方では、佐藤を尊敬もし、おそれていた。佐藤の「妖婆」評が「新潮」に載ったあと、芥川がえらく、しょげかえっていたのを記憶している。

世間では、よく二人を比較して芥川を上位に置くが、私は必ずしもそうとは思わない。学者として、文学の造詣は芥川の方が上だろうが、作品についていえば、私自身の書くものが佐藤により近いせいか、佐藤の作品の方が好きである。

佐藤は理解の方面が実に広く、本職の詩では和歌、漢詩、英詩などまで鑑賞し、小説でも日本、中国の古典から外国の新しいものまで、よく味読していた。<sup>4</sup>

1964年当時、周作人は漢奸として軟禁状態にあり、この文章を目にしていた可能性は低いと思われるが、佐藤と芥川を比すればやはり佐藤に惹かれていた周作人(芥川最賞は魯迅の方か)と、谷崎の想いはある意味通じ合っていたと言えるかもしれない。

### 三

以下、収録作四篇のそれぞれについて、佐藤原作の発表状況と周作人の翻訳の実際を整理しておきたい。最初は、佐藤「私の父と父の鶴との話」である。

該作の原載は、『大阪朝日新聞』夕刊に1919(大正8)年7月23日から8月2日まで11回にわたって連載された『わが生ひ立ち』(副題：幾つかの小品から成り立つ幼年小説)の中の、「頭の赤い鶴の話(一)」(7月30日)と「頭の赤い鶴の話(二)」(7月31日)である。

(参考まで、各篇の題名は次の通り。「はしがき」「大きな戸の話」「大きな犬と黄色い鳥との話」「私の父の家の話」「梟の声の話」「一寸法師の先生と大きな太鼓との話(一)」「一寸法師の先生と大きな太鼓との話(二)」「頭の赤い鶴の話(一)」「頭の赤い鶴の話(二)」「牛や馬のお話」「山雀の話ルパの話」)

このうち「私の父と父の鶴との話」の原作たる「頭の赤い鶴の話(一)(二)」は、1920年1月1日発行『サンエス』2巻1号に「思ひ出のなかから」の標題のもと、ここに初めて「私の父と父の鶴との話」の小題が付されて再掲載される。そして1921年10月、初出からの大幅な改稿を経て『幻燈』(新潮社)に収録された<sup>5</sup>。『現代日本小説集』掲載の翻訳はこの『幻燈』に依ることが周作人の「附録(作者に関する説明)」に言明されていたが、周自身が述べるように、同じ『幻燈』に同『現代日本小説集』収録作「たそがれの人間」が収められることや、以下で検討するように、

<sup>4</sup> 『谷崎潤一郎全集 第二十三巻』(1969年、中央公論社)、391頁。

<sup>5</sup> 『定本 佐藤春夫全集』3巻(1998年、臨川書店)、466頁「解題」を参照しつつ、実際に原本すべてについて改めて照合等の調査を行った。

その訳文が『幻燈』所収作の文章と逐一对応することから、周作人が使用したのは確かに、初出の『大阪朝日新聞』など他の版本でなく『幻燈』であったことが認められる。

なお、周作人による佐藤春夫書籍購入状況については、『周作人日記（影印本）』（1996年、大象出版社）「読書・購入書目」から辿ることができる。『日記』『書目』に記される佐藤の著作は次の通り（（ ）内は、書目記載の年月）。

『お絹と其ノ兄弟』（1918年4月）、『美しき町』（1921年10月）、『幻燈』（1921年11月）、『南方紀行』（1922年6月）、『我が一九二二年』（1923年11月）、『剪られた花』（1923年12月）、『美人』（1924年2月7日）、『退屈随筆』（1927年1月）<sup>6</sup>

「作者に関する説明」に見えていた、周作人が翻訳テキストに用いたと言明する佐藤の著作集、『幻燈』『美しき町』『お絹と其の兄弟』の三冊は、ここにすべて揃っている。

以下、佐藤の原文と周作人の訳文を具体的に対照した結果、気になった箇所を挙げてみる。ご覧の通り小論では基本的に意識、誤訳の指摘に止まるが、今回まずは基礎的作業として、当時の周作人の実際の訳業を瞥見しておく。

### 「我的父親與父親的鶴的故事」

A：佐藤春夫「私の父と父の鶴の話」（『幻燈』、1921年10月20日、新潮社刊）

B：『現代日本小説集』<sup>7</sup>周作人訳（1923年）

*P.329*（『現代日本小説集』の頁による。以下同じ。）

A：その顔が庭さきを歩いてゐたのである。（「顔」は、「鶴」の明らかな誤植か。：引用者按）

B：看見那隻鶴已經在庭前走。

A：小さな頭が赤かった。（中略）一番小さな石盤拭きほどの丸さであつた。

B：小小的頭是紅的。（中略）和最小的擦石板的圓呢一樣大小。

A：頸と尻尾がちよつぱりだけ眞黒だ。

B：只在頸子與尾巴毛上有一點黑。

*P.330*

A：赤い花も咲いた。白い花も咲いた。

B：開著紅的花，也開著白的花。

<sup>6</sup> 参考まで、魯迅蔵書（北京魯迅博物館編『魯迅手跡和蔵書目録』）中の佐藤春夫“関連”書目は、次の通り。『魔女』佐藤春夫著（1931年、読書家版一〇〇〇部之九二）、『世界ユーモア全集（12）支那篇』佐藤春夫編訳（1933年、訳者献呈本。「阿Q正伝」「幸福な家庭」収録）、『魯迅選集』（1935年、岩波文庫。佐藤春夫、増田渉共訳）、『支那印度短篇集』佐藤春夫編（1936年、河出書房。増田渉訳「眉間尺」【原題「鑄劍」】収録）、『霧社』佐藤春夫著（1936年、昭森社。台湾をテーマとする小説、紀行文文集）

<sup>7</sup> 小論にて使用した『現代日本小説集』の版本は、中華民国12（1923）年6月初版、14（1925）年12月三版。故丸尾常喜先生より贈られたものである。改めてここに記し感謝を表したい。

A：齒朶の陰には爪の赤い蟹が居る。時々出てくる。

B：在羊齒裡的陰裏，紅色的蟹住著，時常出來。

**P.331**

A：通り抜けになつてゐる家の土間のなかへさへ這入り込んで来た。

B：便是過路的一間泥地的屋裏也進去。

A：昔の殿様のお堀のあとで、私の父の診察所の窓から直ぐ見えるところにある。

B：這是先前藩主的城壕的舊跡，就在左近地方，從我的父親的診察室窗內望去，就能看見的。

A：小さな石でも鶴に投げると、鶴は大股でその人の方へ突き進んで來ることがあつた。

B：用小石子投擲他，鶴便大步的啄過去。

A：胸のあたりだとか、翼のつけ根などから、白い小さな羽根が、ふわりと落ちて來ることがある。

B：從他的胸前，或是翅子上，有白的小羽毛飄飄的落了下來。

**P.332**

A：私の父の鶴はそれ位より飛べなかつたのである。

B：我的父親的鶴這一點路以外是不會飛的了。

A：たしか、夕立が晴れて虹が懸つた夕方、

B：的確是陣雨初晴，

**P.333**

A：私は得意になつてにたにたと笑つて、（傍点ママ：引用者注）

B：我得意的微笑，

**P.334**

A：今坐つてゐるここのお座敷やら。臺所の方やら。裏の家やら。

B：現在坐著的上房，廚房以及後邊的小屋，

A：或る時、たうとう死ぬことになつた。

B：有一天終於死掉了。

**P.335**

A：いっぽん氣な辰は、申し譯がないと言つて泣いた

B：老實的阿辰說這實在是對不起，便哭了起來，

A：私も時々父についてそこへ、

B：我也時常跟著父親清早走去，

**P.336**

A：多分或る年の夏來て、

B：大約是在一年的夏天擊來，

A：Tといふ町の殿様が、

B：住在T街的爵爺



以上が原文と周作人訳について、意識、誤訳或いは日本の語彙がそのまま使用されていると思われるものなど、細かい点までその意味上の異同を拾った結果であるが、基本的に極めて忠実に訳されていることが了解できよう。

次に、『現代日本小説集』掲載第二篇たる「たそがれの人間」の検討に移りたい。

原載は1921年10月1日『文章倶楽部』第六年第十号巻頭。単行本『幻燈』（1921年10月20日、新潮社）に収録。なお前述の如く、周作人が依拠したと言明するこの『幻燈』には、「私の父と父の鶴との話」のほか、「私の父が狸と格闘した話」「夢を築く人人」等を収める。

以下、佐藤の原文と周作人の訳文を対照しつつ問題と感じられる部分について比較検討したい。

### 「黄昏的人」

A：佐藤春夫「たそがれの人間」（『幻燈』、1921年10月20日、新潮社刊）

B：魯迅『現代日本小説集』（1923年）

#### P.338

A：戯文

B：擬作

#### P.339

A：あなたは上海へ行かれますか？ 僕はせつかく東京へ行つても張り合ひがないやうな寂しい氣がします。あなたが支那へ行つてしまはれるとすれば・・・。

B：・・・・・倘若你真是已經往上海去了，・・・・。

（P.130では、原文の「支那」をそのまま「支那」と訳している。ここは単純ミスか？）

A：「それは心の病気だから、唯、静かにして恢復するのを待つてをればいい」

B：「這是心的毛病，只能靜養著，等他恢復過來。」

A：僕のやうな者は所謂たそがれの人間とでも云ふので、いつれは自滅すべき種屬であるのは、

B：像我這樣的人，大約可以說是所謂黄昏的人，將來總是自滅的族類：

（このように、傍点は訳文には反映されていない箇所多数。：引用者注）

#### P.341

A：それは自分が徹底しないためでせうか？

B：這難道是我不徹底的緣故麼？

#### P.343

A：あなたのお父さんが狸と格闘された話は気に入りました。勿論。——結局へんに終つてしまふと言ふのが。

B：你的父親與狸格鬥的故事，很中了我的意，——在末後很妙的結束的地方。

（「私の父が狸と格闘をした話」：1921年8月1日発行『婦人公論』（第6年第9号）原載。後に『幻燈』に収録。：引用者注）

A：人間の意志の力

B：人間の意志之力

中国では基本的に“人”の意味で用いられない「人間」を“人”の意味でそのままに訳すのは、日本留学生のある種“癖”であった（魯迅にも）。同様に「妙」も日本語的に使用されている。次に、第三篇、「形影問答」について見ていきたい。

原載は1919年4月1日『中央公論』第三四年第四号。「寓話二つ」の標題で「薔薇と詩人との話」とともに掲載。後に、単行本『美しき町』（1919年1月18日、天佑社）に「形影問答」として単独収録。

この作品については、『現代日本小説集』が初出ではなく、周作人はまず1922年1月8日付『晨报附（副）刊』に、【仲密（周作人）譯 日本 佐藤春夫作「形影問答」】として掲載しており、そこには次のような「訳者附記」がしたためられている。

佐藤春夫生於一八九一年，是現代日本的一個詩的小說家，所著有「田園之憂鬱」等五種，我以前曾譯過一篇「雉雞的燒烤」，登在去年本報上；在「覺悟」上登過鳴田君譯的「早春的一日」。現在這一篇係從小說集「美的街市」中譯出。法國波特萊耳的散文小詩中有一章「月的恩惠」，（我的譯文收在譯詩及小品集「我的華鬢」中，今年春間想付刊。）可以參看。

一九二二年一月五日附記。

冒頭の佐藤の生年は1892年の誤りだが、『現代小説集』に収める「作者に関する説明」ではきちんと訂正された。またここに見える佐藤への献辞「詩的小説家」や、ボードレールへの言及も、「作者に関する説明」のなかの言葉「世紀末的詩情」に継承されている。

では以下、佐藤の原作と周作人の訳文検討を載せる。訳の上で気になる箇所は多くない。

### 「形影問答」

A：佐藤春夫「形影問答」（『美しき町』、1919年1月18日、天佑社刊）

B：魯迅『現代日本小説集』（1923年）

（初出1922年1月8日『晨报附刊』所収分と比較すると、かなりの字句異同が認められた。だが、基本的に句読点や表現の小変更にとまり、大きな改変は見られないようだ。例えば「同」→「和」、「長着」→「生」、「生着」→「有」、「把」→「將」、「好像」→「彷彿」、「房子」→「屋子」など。）

### P.345

A：切ない故郷

B：難捨的故郷

A：孤獨と退屈との研究

B：孤獨與沈悶之研究

**P.346**

A：人間の夫婦といふものに似てゐる。

B：正和人間の夫婦相似。

A：短い四肢を持った長い胴體の兩端に、その各に頭が一つづつある。その一つを退屈といふ、もう一つを孤獨といふ。この最も畸形な双生児のうちで、先づ人を捉へて壓へつけるものは前者であり、その壓へられてゐる彼の骨を噛むものは後者である……。

B：在生着短肢の四肢の身體の兩端、各有一個頭。一個叫作孤獨、還有一個叫作沈悶。在這畸形的雙生兒の中間、先將人捉住壓倒的是前者、咬那被壓倒的的人的骨頭的是後者……。

**P.347**

A：その人は、ちつと月の方へ、永い瞬間を凝視した。

B：他對着月，暫時的凝視着。

A：第一短編集

B：第一小説集

**P.348**

A：影などがものを言ふのにだんだん腹が立つてきて、

B：對於影子什麼也說起話來，漸漸的了生氣，

**P.349**

A：それ程、私は威たけだかになつたが、やがて妙に、非常に重くるしく悲しくなつた。

B：當時我那樣的傲岸，但是便又覺得非常的沈重而且悲哀了。

「退屈」と「孤獨」をなぜ敢えて入れ替えたのか（93、95頁）。「永い瞬間」という佐藤が敢えて記した矛盾表現を直訳せずに「暫時」と訳し替えたのはなぜか（同）。また、98頁の原文「妙」を周作人は訳出しなかったが、中国語の流れにはそぐわないと判断したか。幾つかの問題を残すが、ただやや長編の「形影問答」翻訳全体で気になる部分は以上のごく僅かであることから改めて周作人の原文に忠実な訳業が確認される。

最後に、第四篇「雉鶏的燒烤」の検討に移る。佐藤春夫「雉子の炙肉」は『お絹とその兄弟』（新進作家叢書 16 1919 [大正 8] 年 2 月、新潮社）原載。周作人も翻訳に当たってそれを使用し、そのことを「作者に関する説明」でも言明しているのは見てきた通り。周作人の翻訳は『現代日本小説集』が初出ではなく、「形影問答」同様、まず『晨報附刊』1921 年 7 月 9・10 日に掲載された。そこ（10 日付け）にはやはり「附記」が併載され、次のようにある。

佐藤春夫（Sato Haruo）一八九一年生、有「田園之憂鬱」一書最有名。這一篇係從小説集「阿絹與其兄弟」中譯出。

篇中有不能了解的地方、承 H S 君說明、甚為感謝。

一九二一年七月六日記。

さきの「形影問答」の半年前に翻訳掲載されたこの「雉鶏的燒烤」附記にて、同様に生年が誤りであるのは当然と言えよう。最後に引かれる、周作人が翻訳に当たって教えを請うた H S 君と

は誰であろう。魯迅であればLSとなろうか。待考。なお、「雉鷄的燒烤」訳載が完了した翌7月11日の同『晨報附刊』には、魯迅の「故郷」連載が開始されていることは注目される（「故郷」は初出1921年5月『新青年』9巻1号から転載された）。当時、周兄弟が手を携えて文学活動を遂行していたさまがここにも顔を覗かせている。以下、原文と翻訳の対照を行う。

### 「雉鷄的燒烤」

A：佐藤春夫「雉子の炙肉」

（『お絹とその兄弟』（新進作家叢書16 1919〔大正8〕年2月、新潮社）

B：『現代日本小説集』周作人訳（1923年）

（初出1921年7月9・10日『晨報附刊』所収分と比較した結果、「的」の挿入などの微細な変更はあるが、ほぼ同じ。『易经』→『易』、「可以吃了」→「可以吃到」が最大の変更。）

### P.350

\* 聖書引用部分、大幅な補充。（後述）

A：今も今とて歩きゆくその後姿をつくづくと眺めながら、

B：他正一心望著先生走路の後影

### P.351

A：「はい、見ましてムいます。」

獨言のやうな師の言葉に子路は答へた。さうして静かな、寧ろ静かすぎる老師の歩につき従うて、また歩み出した。

「あの雉子はね、十歩に一啄、百歩に一飲して、

B：「是、看見了。」

「那雉雞，十步一啄，五步一飲，

A：靈そのものでも或は影そのものでも歩くかのやうな

B：精靈或影一般走著的，

### P.352

A：簣を荷うた一勞働者（「すのこ」一般的に中国語で「竹苇子」：引用者注）

B：荷簣的勞働者（中国語の「簣」は、「わらで編んだもっこ、俵」を指す。：引用者注）

A：「由よ、もう歸らうではないか、私は一日も早く『春秋』を書き了へなければならぬ。」

\*

B：「由呀！ 我們回去罷。我是巴不得早一天也好，將春秋趕緊寫完呢。」

（「\*」による一行の間隔が、訳文では省かれている。：引用者注）

A：全く雉子の肉といふものは不味くはない。

B：雉雞的肉確也很好吃；

### P.354

A：三度炙肉を把り上げて、三度炙肉のにはほひを嗅いだ。

B：第三次舉起盤來，把燒烤的香氣再聞了一會。

A：何故か、鼻に涙が流れ込んだ人の聲のやうであつた。

B：不知怎的彷彿是鼻子裏流著鼻涕的人的聲音了。

A：この話には別にモラルめいたものはない。

B：這篇故事裏，也並不含著什麼「寓意」一類的東西。

佐藤春夫の「雉子の炙肉」は、前掲藤井書の解説を借りれば、「『論語』「郷党」編に見える野鳥のキジをめぐる孔子とその弟子の子路との応酬をめぐる一節を短編小説としたもの」<sup>8</sup>、孔子つまり儒教を下敷きとした話であつた。だが、佐藤はこの作品の冒頭に聖書「マタイ伝第十六章」の一節と「論語・郷党」の一節を並べて引用している。「マタイ伝第十六章」は以下の如し。

その弟子むかふの岸に到りしにパンを携ふることを忘れたりイエス彼等に曰ひけるは戒心してパリサイとサドカイの人の麩酵（パン種：引用者注）を慎しめよ弟子たがひに論じて曰けるはパンを携へざりし故ならん……云々  
馬太傳第十六章

この部分、実は周作人は翻訳に当たり、原文に無い部分まで大幅に補っている。「雉子の炙肉」翻訳における最大の改変で最も注目される箇所であるが、これまで見てきたように周作人は佐藤春夫の原文を極めて忠実に翻訳してきた事実から見れば、周作人の佐藤春夫翻訳における最大の「反逆」であつたとも言えようか。ここにその実際を整理して示す。

まずは、周作人の当該部分の訳文から引用する。

門徒渡到那邊去，忘了帶餅。耶穌對他們說、你們要謹慎、防備法利賽人和撒都該人的酵。門徒彼此議論說、這是因為我們沒有帶餅罷。（耶穌看出來、就說、你們這小信的人、為甚麼因為沒有餅彼此議論呢？你們還不明白麼？……我對你們說的話、不是指著餅說的、你們怎麼不明白呢？你們卻要防備法利賽人和撒都該人的酵。門徒這纔明白他說的、不是叫他們防備餅的酵、乃是防備法利賽人和撒都該人的教訓。）-----馬太福音第十六章

後半の括弧に太字で補う部分がすべて佐藤の原文に無い、周作人が自身の判断で付け加えたものである。周作人が付け加えた部分を、日本聖書協会「聖書本文」<sup>9</sup>にて補えば、次の如し。

イエスはそれに気づいて言われた。「信仰の薄い者たちよ、なぜ、パンを持っていないことで論じ合っているのか。まだ、分からないのか。（〔引用者注〕周作人が省略した箇所は以下の通り：覚えていないのか。パン五つを五千人に分けたとき、残りを幾籠に集めたか。また、パン七つを四千人に分けたときは、残りを幾籠に集めたか。）パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい。」

<sup>8</sup> 藤井省三著『魯迅と日本文学 漱石・鴉外から清張・春樹まで』（2015年、東京大学出版会）、165頁。

<sup>9</sup> 日本聖書協会「聖書本文検索」：[http://www.bible.or.jp/vers\\_search/vers\\_search.cgi](http://www.bible.or.jp/vers_search/vers_search.cgi)

そのときようやく、弟子たちは、イエスが注意を促されたのは、パン種のことではなく、ファリサイ派とサドカイ派の人々の教えのことだと悟った。

(この訳文自体も少々わかりにくいだが、) 佐藤の引用部分だけでは何のことだかおよそ見当はつかない。周作人は中国の読者に紹介するに当たって、せめて意味の取れるようにと補充を行ったと考えられる。ただ、兄魯迅への訣別の手紙もそうであったように、周作人とキリスト教との関係は一概に論ずることはできず、ここにも何らかのもっと深い意識が働いたのかもしれない。なお、佐藤は「馬太傳」とするが、周作人は「馬太福音」へと改訳しており、そこにもこだわりが感じられる。参考まで、前述の『周作人日記』『読書・購入書目』に収められるキリスト教関連とおぼしき書籍は以下の通り。〔( ) 内は書目記載の年月を示す。〕

『二十世紀新約』【英譯】(1920年1月)、『耶蘇』【武者小路実篤寄贈】(1920年8月)、『舊約的文学』(1920年1月)、『現代人的聖書』(1922年2月)、『舊約書の文学』【渡辺善太】(1922年2月)、『基督之模仿』(1923年3月)

\*

以上、『現代日本小説集』に収録される佐藤春夫の作品について、それぞれの背景と翻訳の実際について整理、確認といささかの考察を行った。

最後に、いまだ未定稿ながら、中国における佐藤春夫作品の翻訳状況を挙げる。中国へ翻訳された佐藤作品の傾向は、日本での評判の如何に必ずしも沿ったものとなっていないことは特に注目される。周作人引いては近代中国が佐藤春夫をどう受け入れたのか、そこに何を求めたのか、それは当然のように日本人と異なっていたのである。そうした観点から今一步研究を進めていきたいと考えている。

なお、『現代日本小説集』所収四篇の訳業は、その後も周作人以外には見当たらない。

**参考：中国における佐藤春夫翻訳の状況（単行本）稿**（『現代日本小説集』〔1923〕を除く）

・専集

1931年3月 查士元译『都会的忧郁』 上海 华通书局 263页 32开  
长篇小说。

1933年8月 高明译『佐藤春夫集』 上海 现代书局 211页 冠像 32开  
短篇小说集。收入《星》、《开窗》、《阿绢及其兄弟》、《一夜宿》、《濂沼氏的山羊》等5篇。  
书前有作者致译者的一封信作代序。

1934年7月 李漱泉译『田园之忧郁』 上海 中华书局 276页 冠像 32开（世界文学全集）  
内收短篇小说《田园之忧郁》（一名《病的蔷薇》）和《阿绢和她的兄弟》2篇，以及《殉情诗集》（附原序）。书前有《佐藤春夫评传》和《年谱》。

1935年3月 查士骥译『更生记』 上海 中华书局 386页 32开（现代文学丛刊）

长篇小说。卷首有译者序。

· 散篇

1926年3月 张资平辑译【别宴】(日本名家短篇小说集) 武昌 时中合作书社 200页 32开

内收: 谷崎精二《别宴》、佐藤春夫《消遣的对话》、加能作次郎1篇、江马修1篇、加藤武雄1篇、华田一郎1篇等7篇。卷首有译者序。

1929年5月 张资平辑译【衬衣】 上海 世纪书局 251页 32开

(上海 光华书局 1929年3月再版、1931年5月5版。上海 大光书局 1936年3月6版)

短篇小说集。收入加能作次郎《衬衣》、小川未明1篇、佐藤春夫《消遣的对话》、江马修1篇、加藤武雄1篇、志贺直哉1篇等6篇。

1929年5月 谢六逸辑译【近代日本小品文选】 上海 大江书铺 148页 32开

(1931年3月再版, 1932年9月3版)

内收: 佐藤春夫的《呵呵蔷薇你病了》; 麻生久1篇; 宫岛新三郎1篇; 夏目漱石2篇; 鹤见祐辅1篇; 蒲田泣堇1篇; 芥川龙之介5篇, 加藤武雄1篇; 岛崎藤村1篇; 志贺直哉1篇, 共15篇。卷首有译者前记。

1930年1月 查士元辑译【日本现代名家小说集】 上海 中华书局 122页 32开

(新文艺丛书 徐志摩主编)(1940年12月 昆明再版)

内收短篇小说3篇: 佐藤春夫《某女之幻想》、谷崎润一郎1篇、芥川龙之介1篇。书前有译者序。初版本书名页印有“1929年”字样。

1930年11月 查士元辑译【日本现代名家小说集(第2辑)】 上海 中华书局 172页 32开

(新文艺丛书 徐志摩主编)(1940年12月 昆明3版)

内收短篇小说5篇: 志贺直哉1篇、佐藤春夫《厌世家的誕生日》、有岛生马1篇、近松秋江1篇、菊池宽1篇。书前有译者序。

1932年1月 孙百刚译【先生的坟】 上海开明书店 收入世界少年文学丛刊

宇野浩二1篇、芥川龙之介《蜘蛛的丝》、秋田雨雀《先生的坟》等4篇、小川未明2篇、佐藤春夫《某女之幻想》。

1941年7月 周作人等译 施落英编【少年的悲哀(日本小说名著)】

上海 启明书局 117页 32开

短篇小说集。收入国木田独步《少年的悲哀》等2篇、夏目漱石1篇、武者小路实笃1篇、菊池宽1篇、有岛武郎1篇、佐藤春夫《消遣的对话》、芥川龙之介1篇、加藤武雄1篇、森鸥外1篇、平林泰子1篇等11篇。每篇前附作者小传。

1985年 吴树文、梁传宝译【更生记】 海峡文艺出版社

1989年 吴树文译【田园的忧郁】(小说集) 上海译文出版社

以上。